



# 徳川家康公 と駿府

Tokugawa Ieyasu in Sumpu

愛知大学 地域政策学部長

渡辺和敏 氏

Kazutoshi Watanabe



経歴

昭和21年、静岡県新居町に生まれる。法政大学大学院博士課程修了、文学博士。愛知大学経済学部教授等を経て、現在同大学地域政策学部学部長。主な著書に、「街道と関所」、「近世交通制度の研究」、「東海道交通施設と幕藩制社会」、「ええじゃないか」等。

## 東海道の宿場と交通を整備した家康

一般に日本人は旅行好きの民族と言われているが、その習性は江戸時代の人々から受け継いだものである。江戸時代は封建社会でありながら、それ以前に比して交通、特に庶民の旅が格段に発展した。旅の発展の要因はいろいろあるが、最も重要な点は東海道をはじめとする主要街道に、平均すれば約二〇キロメートルごとに宿場が設置され、その宿場には常備の伝馬・人足がおり、休憩・宿泊施設があったことである。

関ヶ原の役に勝利した徳川家康は、直ちに全国的な交通網の把握と整備に着手した。まず慶長六年（一六〇二）正月、家康は

改めて東海道の宿場を設置し、宿場ごとに伝馬定書と伝馬朱印状を下付した。伝馬定書には、宿場では伝馬三六疋を常備しておくこと、その代償として宿場内の伝馬屋敷地の税を免除することなどが記されている。これによって伝馬朱印状を携帯する公用役人などは、無賃で伝馬を利用できるようになった。宿場に下付された伝馬朱印状は、言わば印鑑証明のようなものであった。

中山道以下の主要街道にも、慶長七年以降、順次、宿場が設置された。こうして江戸を中心とする五街道が整備され、交通が発展する基盤ができたのであつたのである。

宿場で常備する伝馬や人足の利用は公用

